



第2回国際シンポジウム 開催レポート

第2回国際シンポジウムを「総括」する

中村 政則 (神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 教授 / 事業推進担当者)

NAKAMURA Masanori

1 第2回シンポの特徴

第1回と第2回シンポジウムとの違いは、開会の辞で福田アジオリーダーが述べたように、神奈川大学(以下、神大と略称)COEプロジェクトの共同研究者が、これまでの研究成果を積極的に提示したことにある。第1回は、いわば外国あるいは神大以外の研究者から「教えていただく」側面が多かったが、今回はむしろ神大側が主体的・能動的に問題を提起した。したがって、報告も良かったし、コメントも良かった。これが私の全体的な印象である。以下、興味をもった諸点を中心に、感想を述べたい。

2 バーチャル・ミュージアム構想と方法論

セッションの最初の報告者リュ・アラン=マルク(フランス・リヨン第3大学)は、図書館とミュージアムが一体化したバーチャル・ミュージアム構想を提起した。これはある意味で「夢」を語ったものであるが、単なる夢ではない。それは国家や民族的な枠をこえて、「研究と教育の新段階」を創出する可能性をもつ。またリュ教授は

か」という哲学上の根本問題をプラトン・デカルトを経てフッサールからフーコーにいたる哲学史の流れを追うなかで展開した。また文字資料と非文字資料との違いは、文法的コード体系(意味を理解する文法)を持つものと持たないものとに区別できると論じた。これは総合討論で異論がでた論点であるが、後述したい。

3 図像を読む

セッションは、「図像のなかの暮らしと文化 日本と東アジアの近世」をテーマにしたものである。報告者の多くは、COE研究員であり、「我々の研究成果を提供する実践例」を示すものであった。個々の報告に立ち入る余白はないが、福田アジオと田島佳也は、「図像に何が描かれているか」に重点を置いたのに対し、金貞我と王正華(台湾、中央研究院)は「図像はどう描かれているか」、つまり美術史的方法を駆使した。いずれも苦心の跡が読み取れる報告で、面白かった。

コメンテーターのモストー・ジョシュア(ブリティッシュコロンビア大学)とトレーデ・メラニー(ハイデルベルグ大学)は、日本の絵図について、驚くほど該博な知識で興味ある論点を指摘した。Dictionary(字引)に代わるPictionary(絵引)という言葉、20世紀の絵引を作ったらどうか、常民という概念に縛られていないかなど、モストー教授のコメントは重要点を衝いていた。またメラニー教授がアメリカの研究者の意見を紹介しつつ、「中国の絵図には儒教の伝統を引いて、男女差別があるのではないか」と質問した。これに対し、王正華は「宋の時代は、皇帝の目から見ている。Good governanceの様子が描かれているが、清朝の時代になると、市民の目

セッション



文化地図を作成し、すべてをインターネット上で見るようになるようになれば、「研究と教育の新しい段階」が開かれると、壮大な未来図を描いた。これに対し、コメンテーターの橋川俊忠は、その野心的な試みを評価する一方で、果たしてバーチャルな世界がそれほどの汎用性・浸透力をもっているかに疑問を呈し「実物の世界」の喚起力へのこだわりを表明した。

第2の的場昭弘報告は、「認識することはどういうこと

セッション



から見ており、女性がたくさん描かれている」と答えた。ここで王氏はひと言、modernity(近代性)という言葉を使ったが、あとで個人的に聞くと、内藤湖南の「宋の時代からearly modern(近世)が始まる」という学説が念頭にあったという。つづいて金貞我が、朝鮮時代の「平壤監司饗宴図」のなかで描かれている官妓は常民に入れるが、下級官僚は常民に入らないというのは狭すぎるとして、常民概念を「都市を構成する人々」と広く、ゆるやかに規定したいと述べたのは、印象的だった。田島佳也も犀川大橋際の町屋の絵図の上方には、「なんば歩き(右手、右足を同時に出して歩く仕方)をする侍がいたのだが、侍(武士)は常民ではないのでカットしたとのちに私に述べた。

今回のシンポジウムでは常民概念はほとんど出ず、どこかに消えていたが、誰からも何の説明もなかったことを、私は奇妙に感じた。

4 犁から何が見えるか

大会二日目は、「犁の形態比較から東アジアの民族移動に迫る」で、報告者は渡部武(東海大学) 金光彦(仁荷大学) 河野通明の三人であった。それぞれの国の第一級の専門家によるだけあって、見事なプレゼンテーションであった。私は三氏の報告を聞きながら、生産力とは何かを考えていた。私見によれば、生産力は労働手段、労働対象、労働主体の三つによって構成されるが、渡部は中国における犁の起源について、中国古代の犁の形態だけでなく、栽培作物、人間の移動、動物の駆致技術など多面的な角度から、興味ある考察をおこなった。

金光彦教授は古代朝鮮における犁の形態や名称、地域分布などを詳しく説明した上で、犁の形状から、ヨンジャン(道具)は男性器を象徴しており、農民の性意識を表しているとした。いわば民具=犁から、当時の農民の感性やマンタリテ(心性)を読み込まれたのであり、私は深い感銘をうけた(生産力概念の豊富化) について河野報告は、長年の調査・研究にもとづいて、犁を朝鮮型、中国型、混血型の三類型に分類できるとした。また6~7世紀の民族移動ルートを復元する作業をおこない、犁の技術の伝播経路について大胆な推理を示した。これに対し、コメンテーターの尹紹亭(雲南大学)は、「拡大解釈にならないように注意すべきであろう」と述べつつも、「こ

セッション



れで共同研究の基礎ができた」と述べた。金教授も「今回のすばらしい報告を聞いて、私は重大な決断を下しました。韓国における犁の研究書を書こうと思います」と述べた。ちなみに私は、このセッションの報告を聞きながら、図像(非文字資料)の有効性を感じた。もし三氏の報告が、図像の助けを借りずに行われたならば、参加者の犁に対する興味も理解力も深まらなかったと思う。

5 景観を読む

最後のセッションのテーマは、「景観・空間編成分析における資料としての写真の可能性」で、報告者は藤永豪(佐賀大学) 浜田弘明(桜美林大学)であった。「地理学にとって写真は文字資料以上の価値を持っている」「景観の裏側には、人々の暮らしや感情がある」とし、人々の行動がそのまま景観に反映していることを強調した。北京市西単や世界遺産白川郷の景観や相模大野駅周辺の定点観測の写真は非常に興味深いものであったが、澁澤写真にもっと焦点をしばって欲しかったように思う。この点に関連して、鄭美愛(平成国際大学)は70年前の澁澤写真の景観と現在の景観を比較する場合には、ただ行って写真を撮るだけでなく、地元の研究者の協力をえて時代と場所の確定をおこなうこと、また澁澤の旅程を調べておくなど、事前の準備がもっと必要であったと述べた。次に奥野志偉(神戸流通科学大学)は、澁澤写真だけでなく、1930年代の他の写真との比較が重要だとして、『イザベラ・バード 極東の旅』(平凡社、東洋文庫、2005)を一例として挙げた。要するに、中国・朝鮮・日本など

セッション





第2回国際シンポジウム 開催レポート

における景観の時系列変化とアジア地域の横の変化を追及することが大切だというのである。それにしてもコーディネーターの八久保厚志が述べたように、いったい写真と図像はいかなる関係にあるのか、(景観)写真でなければ解明できない問題とは何なのか、私にも知りたいことは沢山あった。

6 総合討論

北原糸子の司会で始まったが、各セッションのコーディネーターの補足説明に多くの時間を割いたために、やや盛り上がり欠けた。他の学会でもやるように、事前にフロアからの発言を何人かに頼んでおけば違った展開になっただろう。工夫が必要である。

総合討論のなかで印象に残ったのは、次の点である。

河野通明は、的場昭弘の意見は「作業班の理解とズレがある。非文字であっても、我々は文字コードにのせて理解している。だから歴史学とつながっていくのだ。科学コードだ」と批判した。時間切れで、議論を深めることは出来なかったが、理論と実証の乖離を象徴する一駒であった。

フロアから「非文字資料にこだわりすぎている感じがする」として、文字資料におけるテキストクリティークの伝統があるように、近世までの絵画にはコード(約束)がある。基本は文字であって、非文字資料は言語の助けなしには読むことは出来ないという発言があった。結局、非文字でなければ伝えられないものは何か、この根本問題に行き着いたように思う。

これからの課題

最後に、残された課題はなにかについて、体系化、比較、人類の範囲の3点にしばって述べたい。

リュ教授は体系化について、「コレクションのコレクション」であると述べた。つまり非文字資料を集め、整理・分類し、データベースを作って、その上で発信のシステムを構築する、これが体系化だと言うのである。私はこの定義にたいへん親近感を覚えた。なぜなら、こういうことならば、すでに我々は福島県会津の只見地域を対象に、その作業に取り組んでいるからである。まだ不十分とはいえ、来年秋までには、その成果を一般に公開することが出来るであろう。また犁、景観のグループもそれ

ぞれの立場から、体系化について言及した。いわば抽象的で茫漠としていた「体系化」が、我々の手の届くところまで来たのである。

は比較についてである。私は常々比較は2つよりも3つが良いと述べてきた。たとえば、日本の亭主は食後、皿を洗わないが、アメリカの亭主は洗うでしょう。これから、日本の亭主は封建的・家父長的だが、アメリカの亭主は近代的で民主的だという結論を導き出したとすれば、どうであろうか。間違いとはいえませんが、おそろべき単純化をおかす危険性すらある。というのは考察の対象を韓国、中国、ベトナムなどアジアに広げ、かつヨーロッパなどに拡大すれば、皿を洗うアメリカのほうが特殊かもしれないし、最近では日本の亭主も食後に皿を洗うほうが多数派かもしれない。つまり比較は2つよりも3つのほうが有効であるし、比較の対象も動いているのだ。

今回は図像、民具、写真班は中国、韓国、日本の三国の比較で統一されていた。それだけに興味ある論点が様々に提出された。私が今回の国際会議は成功とみなす理由は、ここにある。しかし、メラニー教授が「早く図像をドイツで見られるようにしてほしい。頑張りましょう」といい、奥野教授が写真班に対して、「景観写真データはいつ出来るのか」と催促したように、データベースの作成は、COEプロジェクトが終わるまでのあと「一年以内」に完結しなければならないのである。時間との勝負に入ったことを強調しておきたい。

最後に、今日のシンポジウムのテーマは「図像・民具・景観 非文字資料から人類文化を読み解く」となっているが、その「人類文化」というのは、どの範囲をさすのか。ヨーロッパ、アフリカ、南米は「人類(文化)」に入らないのか。これは神大COEプロジェクト全体にかかわる大問題であって、早急に態度をきめる必要がある。それほど多くない研究員全体で世界の「人類文化」を相手に出来ないなら、せめて中国・韓国・日本そしてベトナム、インドなどアジア地域に限定して、研究を深め、総括していかねばならない。

昨年は、川田順造教授のフランス、アフリカ、日本についての報告があったが、今後はどうなるのか。私個人は、研究者数、時間の短さから判断して、中国・韓国・日本三カ国にしばって纏めていく以外にないと考えるが、これも早急に議論し、確定する必要がある。